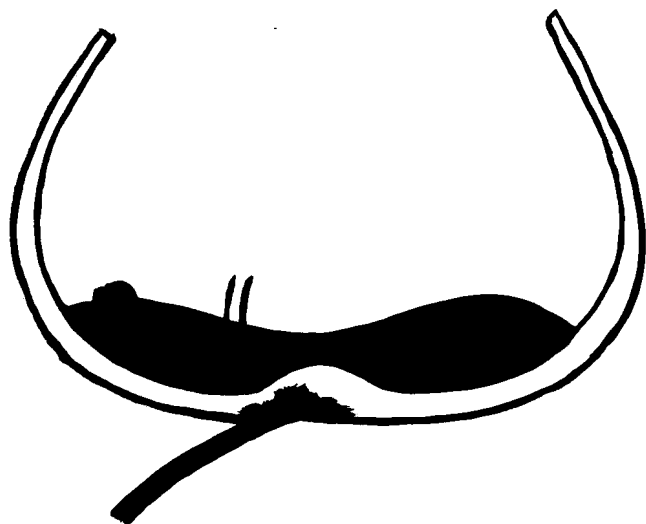


いつのまにか晴れた空

つ
の
ま
に
か
晴
れ
た
空



見
延
典
子

講
談
社

いつのまにか晴れた空

昭和五十六年三月十六日 第一刷発行
昭和五十六年十月二十八日 第四刷発行

著者 見延典子

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号 一〇二
電話東京〇三九四五一二二（大代表）／振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価 八八〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。

© Noriko Minohe 1981. Printed in Japan

目次

いつのまにか晴れた空——5

循環小数——65

石の人——107

新宿の糸——139

島にて——167

二重窓——あとがきに代えて

装帧
重田良一

見延典子作品集

いつのまにか晴れた空

いつのまにか晴れた空

久雄の就職が知合いのツテで内定したのは、夏期休暇にはいる前のことだった。どこに決まったの？ とくり子が何度訊ねても、彼は曖昧にしか答えなかった。久雄は男としてそれほど無口ではないのだが、肝心なことになると口を固く噤んでしまうところがあった。

内定先をようやく教えてくれたのは、もうじき休暇も終わろうとする頃だった。よかったじゃないの、べつにかくすこともないでしょう、立派なもんよ、と彼女は彼の背中を力まかせにどんと叩いた。

そこへいくと、くり子のほうはいたって暢気なものだった。四年前に大学へ進学するために上京してきた彼女は、やはり地方から上京してきていた久雄と一緒に東京で住みたいという以外に、将来に対して具体的な方針があるわけではなく、ただ四年になったとたんに周囲が、就職、就職、と騒ぎたてはじめたので、東京に残る一手段として、彼らと一緒に職を捜さなければならぬような気になっただけの話だった。

大学の就職課の狭い室内は、職を求める学生であふれていた。部屋の三方の壁と中央に設え

られた棚には、企業名別にとじられた資料がアイウエオ順に並んでいるのだが、次々とおしよせてくる学生の波にもまれて、身動きも思うにまかせないほどだ。昼食時もすぎ、一日中でいちばん就職課が混雑する時間帯だった。資料を手にとって調べることにすっかり飽きてしまつたくり子は、久雄の腕にしがみつきながら、蒸風呂のようなその部屋をようやくでることができた。

廊下には、毎日少しずつふえていく求人物件のはりだされている掲示板がある。そこもまた学生であふれていたが、とくに求人物件の少ない女子向けの掲示板の前には、まるで火事場の野次馬のような人だかりができていた。くり子は求人物件を見にいくよりも、わずかばかりの望みを抱いて、雨あがりのみみずみたいにどこからともなくここへゾロゾロと集まってくる女子学生の、嘆息まじりの哀れな姿を見ることが、楽しみで就職課に来ているのだった。

こんなところにやってくる女っていうのは、やっぱりブスが多いのねえ、と彼女は、傍にいる久雄の脇腹を肘でつついて言った。彼は気のない返事をして、廊下の窓ぎわにある銀色をした一本足の灰皿の前で煙草を喫いはじめた。

くり子は彼から離れて、掲示板のほうへ歩いていった。そして人垣のいちばん後ろにつき、すぐ前に立っている短髪の女子学生の肩越しに、掲示板を見ながらせせと書きうつしている

手帳の内容を覗いてから、また久雄のところへもどった。耳もとで、その女子学生が受けるつもりらしい会社名をささやいた。彼女はある反応を期待していたのだが、彼は首をすくめてみただけだった。

久雄は大学の正門の前でくり子と別れるまで、たてつづけに煙草を喫っていた。くり子は、彼が煙草を喫うこと自体それほど気にならないのだが、ヤニのこびりついた茶色い歯を磨きもしないで平然としていられる神経は、どう考えてみてもわからなかった。くり子が煙草を喫わないのは、彼が、パチンコ屋で女が煙草を口の端にくわえながら玉をはじいているのを見ると背筋が寒くなる、ともらしたのを聞いて、なるほど、と思ったことも理由の一つといえそうなだけでも、そんなこと以上に煙草を喫うことによって、自分の口のなかが汚れてしまうように感じることをたいへんに嫌いだっただからだ。

女が煙草を喫うことをいやがる久雄と、喫いたがらないくり子は、その点でつりあいがとれていて、そのためかどうかは知らないが、くり子は久雄から指輪を贈られていた。指輪などというものを二十二年間はめたことのなかった彼女は、金色の指輪をもらったときにはうれしさのあまり、全力疾走で駆けだしてしまったほどだった。指輪の内側に刻まれている「K18」という文字を見てメッキではないことを知り、ますます喜びはつのつていった。以来、左手の薬指にその指輪をはめたまま、寝るときにも銭湯へ行くときにもはずすことはなく、折りにふれ

てほれば眺めることさえあった。

一見して、くり子は何をやらせてもそつなくこなすように見えたが、なんといっても若い身空だったから、人が思うほど堅実な生活を営んでいるわけではなかった。一年ほど前にも、ある男と別れる別れないで一悶着を起こしたことがあった。別れたがったのは男で、別れたがらなかったのは彼女のほうだった。結局、男が彼女のもとから逃げだしていつて、その話にケリがついた。彼女はなりふりかまわず男を追いかけていくほど女々しく落ちぶれたくはなかったし、また、その男にそれほど未練を感じているわけでもなかった。今でもその男をすっかり忘れてしまったわけではないが、思い出してみたくらで、いやな男だった、という後味の悪い思いが蘇ってくるだけなので、なるべく思い出さないようにしていた。

今のくり子には、久雄という男のほうはずっと大切だった。一方的にそう思っているのではなく、指輪までくれたのだから、これはもう将来の約束をしたも同然であろうと考えていた。にもかかわらず、正門の前で久雄と別れたくり子は、そこからさほど遠くはない喫茶店へ、久雄以外の男と逢うためにのこのこ出かけていった。

飯田さんとはどこで知り合ったのか、はつきりと覚えていないのだが、忘れかけたところに電話がかかってきて、以来何度となく逢っていた。彼はすでに勤めていて行動範囲も広く、なにかと馳走してくれたので、久雄から指輪をもらう前には、久雄と逢う回数だけ彼とも逢って

いたのだった。けれども、指輪をもらってしまった今となつては、飯田さんはそれほど重要な男ではなくなつてしまつた。それで彼女の通つてゐる大学の近くまで仕事の都合で来るという日以外は、つとめて逢わないようにしてゐた。

飯田さんは、男にしては色が白かつた。そのうえ三十四になつてもまだ一人者だと言つていたので、くり子は、それは精神的にも肉体的にも不衛生だから早く相手を見つけたほうがいいわよ、とからかつたことがあつた。彼はそこからかいを他の意味にとつてしまつたのか、はたまた、トルコ風呂に通うよりも彼女のほうが手頃で経済的と考えたのか、何かにつけて言いよつてくるようになったのだ。

くり子のだめなところは、久雄という心に決めた男がありながら、彼以外の男から誘いがかかつてきても断わらない八方美人的なところにある。たいてい誘われるままに、ホイホイと出かけていく。生来男好きというか、つまり、どんな男であつてもその男には一つや二つ良い面があるのだと信じていて、男に逃げられた経験があるにもかかわらず、あまり冷たくできないのだった。その考え方でいくと、飯田さんの良い面は、バイタリテイがあつて親切で世話好きな点だと言えるが、しかし、彼女が彼と縁を切らずに性懲りなくつきあいを続けているのは、その程度の魅力にひきつけられてゐるからではない。おそらく男にはわからない女の秘密の部分がそうさせているとしたか、彼女自身にも説明のしようがなかつた。

飯田さんは、矢沢永吉の歌が流れている喫茶店の、入口に近い席に坐ってくり子の来るのを待っていた。テーブルの上の白いストローが立っているグラスのなかには、角のとれた水だけしか入っていないかった。

彼は近づいていったくり子が、向かい側にある黒いレザーの椅子に腰掛けるのを待たずに、矢つぎばやに話しかけてきた。彼が物事を順序立てて言うことを苦手としていきなり本題に入る話し方をするのを、知らないくり子ではなかった。けれども、彼がやや興奮しながら、女子事務員を募集している会社に関合っているから、一度二人で訪ねてみようということを言っているのだとわかったときには、どうしてそんな心配までしてくれているのかと、不思議に思ったほどだった。

「だって、このあいだ、どこでもいいから就職先を世話してほしいって、しつこいくらいに言ってたろう」と飯田さんは、首をかしげたくり子を軽くにらんだ。

そう言われてみれば、言ったことがあったかもしれないな、とくり子はやがて運ばれてきたクリームソーダにストローをゆっくりとさしこみながら、考えていた。

その日のうちに、くり子は久雄に電話をかけ、飯田さんからもちかけられた話の一部始終を

話した。但し、今までのように名前や素性は伏せておいた。別にいかがわしい関係を結んでゐるわけではなかったが、あえて言う必要もないと思つたのだ。訊かれれば答えるつもりだつた。

久雄はあたりまえのように、

——そんないい話を、みすみす断わることはないよ。

と言つた。それでなくとも、大学出の女子は例年以上の就職難なのだから、就職できる可能性のあるところへは、自分のほうからすすんで頭を下げていくべきだ、と言うのだった。

それを聞いて、くり子はがっかりした。期待していた答えとは、正反対の答えが返つてきたからだ。久雄が働けば、彼の得る賃金で二人暮していけないことはない、それではどうしても暮していけないというのなら、

——おまえがアパートにでも出ればいいじゃないか。

と言つてもらいたかつたのだ。

久雄とくり子はこの春ひょんなきつかけで知り合つて以来、たがいのアパートを往き來する生活を続けていた。同棲をしなかつたのには、いろいろの理由があつた。

久雄は、二人が住めるような間取りのあるアパートを借りるためには、ある程度まとまつた金がある、と言つていた。彼は郷里からほとんど援助を受けずにアルバイトだけでその日暮し

の生活をしていたし、くり子のほうは親もとから仕送りを受けているというもの、贅沢をできるほどの額はもらっていなかったで、確かに余分な金はなかったのだ。

しかし、その理由には嘘がまじっていることをくり子は知っていた。もしほんとうに金銭的な問題が障害になっているのならばなおのこと、久雄が彼女のアパートへ来るか、あるいは彼女が彼のアパートへ行くかして、たとえ四畳半のむさ苦しい部屋であれ、一つのアパートに住んだほうがよほど経済的はずだった。それに、どうしても二人が快適に住めるような広めのアパートに入りたいというのならば、もっともらしい理由を考えて、明日にでもくり子の実家からお金を調達することだってできた。

だから、久雄の言う理由は理由にならない。

くり子は、久雄が体裁をつくりたがる男であることを知っているで、親や友人の手前軽はずみな真似はできない、とでも考えているのだろうと思っていた。どんな理由であれ、同棲したくないと言うのであれば、くり子は強要したりはしないつもりだった。いずれ一つ屋根の下に住むようになるのならば、何も今から焦って同居を急ぐこともなかろう、と自分に言いきかせていた。

しかし、その理由も、二人が同棲しない理由にはなっていない。

くり子は、自分がほんとうに久雄を愛しているのかどうかわかっていなかった。指輪をくれ

たから将来を考えたのかもしれない、と考えることがあった。けれども、すぐにその考えを打ち消した。それは久雄に対してではなく、自分自身についている嘘だった。

くり子が暗黙のうちに気づいていたそれぞれの嘘が表面に露呈していくのに、時間はかからなかった。

それは久雄が形ばかりの採用試験を受けに行った日の夜だった。くり子のアパートに電話がかかってきた。電話はアパートにあるピンク電話で、かかってきたときには住人の誰かがでることになっていたが、くり子がでることが圧倒的に多かった。彼女の部屋のドアをあけると、すぐ前にそのピンク電話があるからだ。

採用試験とはいっても、すでに採用が内定している人ばかりを集めての懇親会のようなものだとかかれていたので、くり子は気楽な気持ちで、

——どうだった？

と訊ねた。

——べつにどうっていうことないけど。

久雄の声は明るかった。

——俺、大阪へ飛ばされることになったんだ。うん、そう、そう。大阪へ行くんだよ。

その言い方が実に飄々乎としていたものだから、くり子までとっさに、